
至極透明な膜

多加也 草子

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

至極透明な膜

【コード】

N0638B

【作者名】

多加也 草子

【あらすじ】

大学生の瀬田拓也は、ミツルと言う名でスナックのママ桜ルミ子と付き合っていた。ある日、ルミ子が殺害され、容疑者として拓也が逮捕される。優等生の拓也と仕事中心の生活をしてきた母、瀬田彩子、2人の苦悩が始まる。

序章

「じゃあな」

「おう、じゃあな」

卓が帰ってしまうと、公園は静まり返った。

「くそっ！」

ただ1人、取り残された拓也は卓が言った言葉を思い出した。

「母ちゃんが、今日もおばさんの帰りが遅いのなら、うちで夕食食べろって」

拓也は断っていた。以前に1度、卓の家の夕食に招かれた。味はおいしかったし、卓のおじさん、おばさん、お兄さんに妹の大勢で食べる夕食は楽しかった。けれど、おばさんは拓也の家族の事をいろいろ聞いてきた。

「あら、お母さん、いつも帰りは8時過ぎなの」

「じゃあ、1人で留守番は寂しいでしょ」

「いくら、りっぱなお仕事していてもねえ、子供をほったらかしにするのはねえ」

そんな事を言われた。拓也はもう2度と卓の家には行かないと決心していた。

「まだ、腹は減っていない」

拓也は公園を出て、自宅とは反対の方向に進んでいた。5年生になつてから、放課後に遊ぶ友達が減ってしまった。みんな塾やら習い事をやっていて忙しいのだ。拓也は何をしようか考えているうちに、同じクラスの数人が通う学習塾の前にやってきた。その窓からは煌々と明かりが漏れていた。拓也はそつと窓から中をのぞいた。同じクラスの智や美加がいるはずだ。皆が一樣に俯いて机に向かっていた。なぜか皆が同じに見え、拓也にはその中からクラスメイトを見つけることがどうしても出来なかった。

「変なの」

拓也はぶらぶらと歩き始めた。
ドンッ！

突然、後ろから誰かがぶつかって来た。

「何を！」

拓也は振り返ろうとしたが、既に相手は前方へ走っていた。拓也よりも少し背が高い少年だ。6年生くらいだろうか。

「こら待て」

後ろからの声に振り返ると、コンビニエンスストアの店員らしき男が走ってきた。少年を追いかけているようだ。

「万引きか」

拓也は逃げて行く少年を軽蔑した目で見た。そして、また歩き始め公園まで戻った。拓也はズボンのポケットに入れておいたカラーボールを出そうとポケットに手を入れた。

「なんだこりゃ」

いつの間にか、ポケットの中にボール以外のものも入っていた。出してみるとライターとガムであった。少年にぶつかった時、入れられたのであるうか。コンビニエンスストアに返しに行けば、自分が怪しまれてしまうだろう。

「ちっ！」

拓也は舌打ちをし、地面を蹴った。どうしたものかと考えながら、手にしたボールを塀に向かって投げた。塀にぶつかったボールは、地面で1度バウンドし、拓也の元へちゃんと返ってきた。拓也は投げ続けた。

何度も何度も。

投げているうちに、卓のおばさんの言ったことや塾の窓の中の光景、さっきの万引きをした少年の後姿、ライターとガムが次々に思い出され、自然にボールを投げる手に力が入っていった。加えて視界の端の方では、煌々と明るい外灯に小さな虫や蛾が無数に飛んでまわりついていて、いくつかが電球に激突し落ちていくのが見え、嫌な気分になって行った。

「火、点けてくれないかなあ」

突然、拓也の背後で声がした。振り返ると、さっきの少年が煙草を加え、シーソーの端に体育座りをしていた。拓也はボールを投げのをやめ、少年にライターとガムを渡すと、さっさと帰ろうと歩き出した。

「お前、帰る所ないんだろ？」

少年が後ろから声をかけた。拓也は無視して歩いた。

「俺もなんだ。帰れば親父が大暴れさ」

少年の言葉に拓也は足を止め、少年を見た。少年は寂しそうに俯き、自分で煙草に火を点けた。拓也はしばらくの間、煙草の煙がゆらゆらと外灯の虫たちの方へ昇っていくのを見つけていたが、ふと少年に近づき手を差し出した。

「瀬田拓也、5年だ」

そんな拓也に少年は少し驚き、そして手を差し出し握手した。

「高杉充、5年だ。昨日越してきた」

ルミ子と俺

新宿……

この街に来ると、まず雑多なネオンが目に入る。そして、人の多さに驚かされる。決して美しいとは言えない街だ。歩道の隅には毎夜繰り返される酔い潰れた者たちの嘔吐物の匂いが染み付いている。この街、否、都会の人間はこの悪臭になんの違和感もないかもしれないが、片田舎から出てきた俺はいつも顔をゆがめてしまう。けれど、俺は何度となくここに足を運んでいた。客引きの男が大勢立ち、ホステスたちが道を急ぐ。その中を大学生の団体は居酒屋にカラオケへと移動し、サラリーマンやOLは顔を赤らめ、千鳥足で楽しそうに歩いている。ワンピース姿の中年の女が寝転がりハイヒールを投げ、わあわああと騒いでいても大抵の人はその横を何事もなかったように通り過ぎる。静かに徘徊する浮浪者はこの街に自然の風景のように溶け込んでいる。

俺がこの街が好きなのはなぜだろう。雑多な景色が好きなのかもしれない。ここには金持ちも貧乏人も、博識者も低能者も、最先端の服を着た人間も、そんなものには疎い人間も歌舞伎町の真ん中を闊歩している。流行しか追いかけられない若者のいる渋谷みたいな街よりも、高級感のある銀座や有楽町の街よりも好きなのだ。

そして、俺がここに来る理由がもう一つあった。俺の唯一の親友だった充の実母で、俺の恋人のルミ子がこの街にはいるのだ。駅を降りて歓楽街を歩いていると自然に俺の歩き方は変わって来る。この街に馴染みきった男を装いたかった。

最終電車の時間で皆が駅に向かっていているのとは逆方向に俺は歩いていった。酒の力で高揚した雑踏の中に身を置いていると俺の心も高揚してくる。途中でルミ子に携帯電話で連絡をした。「もうすぐ来られるのね。うん、もう皆は帰ったわよ」俺はルミ子の明るく響く声を聞くだけで笑顔になってしまう。17も上の女の身体に溺れ

るとは自分でも不思議であった。彼女の白く豊満な胸が脳裏に浮かび、俺は足を速めた。ルミ子がやっているスナックは、通りから少し横道にそれた歓楽街の中では静かな場所にあった。ステンドガラスが入ったドアをノックすると、いつものようにルミ子の笑顔が出迎えた。俺は中に入ると彼女を押し倒した。

「いやよ。来たばかりじゃない」

彼女は軽く抵抗するような素振りを見せるが笑顔が俺を受け入れていた。赤いカーペットの上に倒した色白の肌のルミ子は美しかった。俺は優しく彼女の首から右肩にかけて口唇を這わせた後、彼女の顔に視線を移した。彼女の潤んだ瞳が俺を求め、彼女の口元からはチラチラと真つ赤な舌が見え隠れした。俺は堪らず彼女にしゃぶりについた。激しい愛撫で近くにあったテーブルや椅子の脚に身体がぶつかると、彼女の肢体はそんな事はおかまいなしに俺の身体に絡まってきた。俺は彼女の柔らかい身体に埋もれて行く感覚が好きだった。彼女の中にいると無重力の感覚に陥り、頭の中が真つ白になった。

「私のかわいい坊や」

俺は一気に吐き出してしまつと、どさつとルミ子の胸に顔を埋めた。そして、ルミ子が優しく頭を撫でるのに身を任せた。充分に彼女の指先を頭皮に感じてから、俺はカーペットの上に転がり、天井を眺めた。彼女は俺の胸に手のひらを当てた。俺は彼女の息づかいを聞きながら充の事を考えた。お前のお袋さんはいいい女だぞ。まあ、俺んちの彩子さんと同じで母親の才能はないかもしれないがな。

「ミッル」

ルミ子が俺を呼んだ。俺は本名をルミ子に告げず、彼女の息子の名前を敢えて呼ばせていた。天国の充も喜ぶだろう。

「何を考えているの、ミッル？」

「ルミ子に出会った時の事さ」

俺はそんな事を言いながら、大きな欠伸をした。

俺とルミ子は昼下がりの公園で出会った。否、正確には俺の存在をルミ子に示したのが初めてであった。俺は彼女を散々調べつくした後、偶然の出会いを装ったのだ。ルミ子は独り、ベンチに座って公園で遊んでいる母子を眺めていた。俺は、すぐ横で立ち止まり、母子を眺め、ボソツと「母親とあんなふうに遊んだ記憶がない」と言った。それを聞いたルミ子は「息子とあんなふうに遊びたかった」と言った。俺は、すつとルミ子の方に手を差し出し「大きな代役でごめん」と言った。ルミ子が俺の手を握ると俺は走り出した。池で水遊びをしている子供たちに交じって池の中を走り回り、ルミ子に水を掛けた。彼女も負けじと俺に水を掛けながら、少女のように笑った。無垢な笑顔だ。俺は池から飛び出ると、ずぶ濡れのまま芝生の上でゴロゴロと寝転がった。芝が無数にまとわり付く。彼女は立ったまま笑顔でそれを眺めていたが、そのうちに俺の横に寝転がり、俺に身を摺り寄せてきた。その姿が子猫のようだった。俺はその場で彼女に絡まり、彼女も絡まりついた。すると、周りにいた子供たちがワーワーを叫びながら寝転がり、俺たちに身を摺り寄せてきた。上から被さって来る子もいた。10人くらいの塊が俺たちを覆い、くねくねと身をうねらせながら絡まっていた。俺とルミ子は顔を合わせて笑った。皆も笑った。

「あの時のルミ子はいい笑顔だったな」

「あら、今だっといういい笑顔くらい出来るわ。あんと一緒にいらいつでも笑顔にね」

ルミ子は、今度は俺の上に乗ってきた。柔らかな重みが俺を笑顔にさせる。

「お前は俺のものだ」

俺はぎゅっつとルミ子を抱きしめた。ルミ子は俺の胸に顔を当てる。そして、俺を悲しい目で見た。

「ねえ、もし私が、猿渡と、そして今あるものすべてと手を切る為、に店を捨ててどこかへ逃げるとしたら、ミッルは一緒に来てくれる

？」

猿渡とはこのスナックのオーナーでルミ子の愛人であった。

「ルミ子は俺がいなければだめだろう？」

俺は愛しさのあまりルミ子のおでこに軽くキスをした。なんてかわいい女だろう。ルミ子は瞳を潤ませ俺の胸を人差し指でなぞった。「私が、もしも、もしも、一緒に逃げてくれたあんたを捨てたらどうする？ 私が息子を捨てたように」

ルミ子は自分の店を出す為の仲の良い先輩ホステスから猿渡を奪っていた。それなのに猿渡から逃れようとしている自分自身に嫌気が差していると言っていた事があった。俺からもいつか逃れようとするかもしれない。俺はルミ子の潤んだ瞳を覗き込んだ。ルミ子も俺の瞳をのぞいた。彼女の瞳の奥には漆黒の世界が続いていた。俺は彼女の瞳に魅入ってしまい吐息を漏らした。すると、ルミ子は俺の視線から瞳を避けていくように俺の胸の上に顔を滑らした。躍動する俺の鼓動を聞きながら、ルミ子は俺の答えをじっと待っていた。「あんたは息子を愛しているだろう？俺はあんたに捨てられても愛していてさえくれればいいさ」

俺の答えにルミ子は、はっとして俺の胸から離れた。

「愛している？捨てた息子を愛している？ははっ」

ルミ子は空虚な笑いを漏らした。

「産んだまま捨てた息子を私が愛していると思う？ただ、人間的に罪なことをしてしまった悔いが残っているだけよ。育っていればこのくらいだろうなんて時々思うだけよ。愛なんてないわよ。私が今、愛情を注げるのはあんただけ。過去の男にも愛情なんてありませんわ」

俺は瞬間的に悪魔の言葉を吐露する女に激怒した。

「あんたはクズだ」

俺の上にあったルミ子の腹を思いきり蹴り上げた。

「自分の汚い過去を背負って苦しんで生きろよ。お前は悔やんで悔やんで、愛する自分の産んだ子をこの胸に抱けないことを悔やんで、

悲しみ暮らすべきなんだ。そうにしなれば、自分を産んだきり捨てられた事を恨んでいるお前の息子がかわいそうじゃないか！ かわいそうじゃないか！」

ルミ子は腹を擦りながら床でもがいた。俺は立ち上がりルミ子を蔑んだ目で睨んだ。

「なっ、何？」

ルミ子は何が起こったか理解できないようだった。

「息子は毎日毎日考えるんだ。俺はこの世に生まれるべきではなかったのかって！ その苦しみがわかるのか？ おい、わかるのか？」さらに俺は蹴り上げた。何度も何度も。俺はルミ子を冷酷な視線で刺した。ルミ子が口をパクパクとさせていた。

「えっ、何言っているんだ？ えっ？」

俺は彼女の口に耳を近づけた。彼女の掠れたわずかな声が聞こえた。

「わかってるわ。そんなことはわかってるわ。でも、私はこんなふうに生きてきた。毎日毎日、息子を思いながらも、お金と男を求めてきた。だって、息子を手放したのは私の両親よ。私ではないの。私に責任はないのよ。私、じゃない」

声絶え絶えに、涙が頬を伝いながらルミ子が発した言葉であった。そして、ルミ子はぐったりとしてしまった。俺は慌ててルミ子を抱きかかえながら揺さぶった。しかし彼女は動かなかった。

「充！ どうすればいいんだ。どうすれば！」

俺は上を向き、天の充にすがった。充からは何の答えも貰えなかった。腕の中のルミ子を見つめる。豊かな胸が静かに上下を繰り返していた。俺はルミ子を病院に連れて行かなければいけないと、救急車を呼ぶために電話に手をかけた。そして、すぐにその手を止めた。何をやっているんだ、俺は。こんなことをしたら、彩子さんに知られてしまう。彩子さんがきつと俺に失望する。それだけは嫌だ。嫌だ！ 絶対に！ 俺は腕の中のルミ子を静かに床に寝かせて立ち上がった。もう、ルミ子とは終わりにするんだ。そう、ルミ子も

こんな俺を許してくれるまい。ごめんよ！

俺は、全裸のルミ子に俺の白いシャツを掛けた。ルミ子が僅かに眉を動かし、喉を鳴らした。俺は慌てて店を出た。

店を出ると早く表通りに出ようと俺は走り出した。途中で呼び込みの男と店の女2人が行く手を塞いだ。俺が速度を緩めずそのまま過ぎようとする諦めたのか3人は道をすぐに開けた。通り過ぎる時、強すぎる香水の香りが鼻をついた。

「おにいさん、急いでいるようだけど、今度ゆっくり飲みに来てね」
軽い男の声が俺の背後から聞こえた。

「待つているからね」

女2人の甘い声も聞こえた。表通りに出ると終電の終わった時間なのに、酔っ払いがこつた返していた。俺はこの賑わいに安堵し、歩みを緩めた。歩きながら空を仰いだ。

「充、ルミ子さん大丈夫かなあ。俺、酷いことしたなあ。こんなに好きなのに」

充はやはり答えを出してはくれなかった。俺は今まで人を殴った事も殴られた事もなかった。ルミ子を蹴った時、俺の中のいつもの意識が何処かへ行っていた。そして、何年も心の奥底に閉じ込めていた何か俺の意識を支配していた。

突然、酒が飲みたくなった。近くのショットバーに駆け込みバーボンを頼んだ。一口飲むと吐き気を感じ、ルミ子の倒れた姿が目に見えた。無理やり喉にグラスの残りを流し込むと、再びバーテンにバーボンをオーダーした。

早苗と俺

「痛い！」

突然、頭をつつかれた。目を開けると目の前に真つ黒な物体が動いていた。カラスだ！ 振り払おうと手を動かしたが、思うように動かない。悪臭が鼻をついた。自分の口の中から嘔吐物が流れていることに気がついた。それは、半透明の白いビニルにへばり付いていた。俺はゴミの集積所で眠ってしまったらしい。カラスは俺を残飯と間違えているのだ。虚ろな視界で周りを眺めた。冷たく澄んだ空気が俺を包んでいる。朝なんだ。そうだ、ルミ子から逃げ出し、バーボンを飲んだところから記憶が飛んでいた。ルミ子は大丈夫だろうか。俺はなぜルミ子にあんなことをしたのだろう。また、吐き気がした。しかし、もう胃には何も残っていないらしく何も吐き出せない。虚ろなまま俺はゴミのベッドに埋もれていた。通行人が無言で見向きもせず俺の前を通り過ぎて行く。

「キヤハハ、やあねえ、今日も仕事なんですよ。帰ってシャワー浴びてご出勤。頑張つてね」

「早苗ちゃんにつき合わされたら、朝までだもんな。そのうち肝臓悪くしちゃうよ、きつと」

「いいじゃん。大きなお世話よ」

俺の視界に派手なピンク色のワンピースを着た若い女とスーツ姿の男が現れた。女がちらつと俺を見た。その視線が一瞬止まった。俺の虚ろな視線も女を見続けた。男女は通り過ぎた。女は前を向きながら、男の肩に手を置いた。

「じゃあ、またね。また、店に飲みに来てよ。また、朝まで付き合っからさ」

「おう、またな」

男は手を挙げて、歩いて行った。女は男の姿が角に消えると、くると身体の向きを変え、俺を見た。邪を知らない幼児のような視

線だった。ふと、女の無垢な表情に重なってルミ子の寝顔が思い出され、無性にルミ子から逃げて来た自分を悔やんだ。俺は最低の人間だ。そもそも、俺は地を這う邪悪な生き物で、美しいルミ子を愛す資格なんてないのだ。そうだ、これでよかったのだ。あの後、ルミ子はすぐに気が付き、俺の醜態を恨むであろう。そして、すぐに俺のことなど忘れるであろう。そう、願おう。俺は酷い人間なんだ。俺の虚ろな視界の中で女はじっと立ち尽くし、俺を見ていた。俺は僅かに起き上がり、女の方へ手を伸ばした。人の温かさが欲しかった。自分の冷酷さを思い知らされた分、人の温かさが恋しくなった。女は笑顔を俺に向け手を伸ばしてきた。俺の手と女の手が触れた。指先に温もりが伝わってきた。俺の目の縁には涙が溜まっていた。「うちに来る？ お風呂に入った方がいいわ」

女は俺の手をしっかりと握り、俺を起き上がらせた。

女のアパートまで20分以上歩いていたらと思う。その間、ぐだぐだとした歩みの俺をしっかりと支え、女は何も話さずに歩いた。アパートに着き玄関に入ると、俺は倒れこんだ。まだ、相当のアルコールが残っていたらしい。女は玄関先で俺の上着を脱がせた。「まだ酔っているみたいだから、お風呂より寝たほうがいいわね」

女は俺の目を見ながら笑顔をくれた。熱い濡れタオルで俺の顔を拭い、身体を拭くとベッドに誘った。俺はベッドにもぐりこむと、すぐに深い眠りについた。

小学5年生の充が立っていた。俺の見たことのない満面の笑顔だ。充はいつだって笑顔の時の目は寂しそうだった。それなのに目まで笑っている。充が手を差し出した。その手を握った人がいた。その人の顔は最初、ぼやけていてよく見えなかったが、次第にはつきりしてきた。ルミ子だ！

はっとして目が覚めた。充とルミ子は夢だったのだ。ここはどこだろうと辺りを見回し、女の部屋だと理解した。女はいなかった。

出かけたのだろうか。俺は起き上がる気力がなく、近くにあったテレビのリモコンの電源を押した。

「先程入ってきたニュースです。新宿の Snackbar で女性が果物ナイフで胸や腹など数箇所刺され、死亡しているのが発見されました。遺体は Snackbar を経営している桜ルミ子さんと、出勤してきた従業員が発見したとの事です」

そんな言葉がスピーカーから流れた。俺の脳みそがその言葉を理解するまでにかなりの時間がかかった。なんて信じ難いことを言っているのだろう。テレビの画面を恐る恐る覗くと、そこには昨夜飛び出したルミ子の店が映っていた。

ルミ子が死んだ！ ルミ子が死んだ！ ルミ子が死んだ！

なぜ？ なぜだ！ 果物ナイフで刺された？ 俺か？ 否、俺ではない。俺はルミ子を蹴っただけだ。そして、飛び出してきた。俺があそこで逃げ出さなければルミ子は死んでいなかったかもしれない。それとも俺が殺したのか？ 俺の記憶は飛んでいる。酔って覚えていないんだ。あの後、店に戻ってルミ子を刺したのか？

突然、俺の身体がピクツと動いた。そして、ガクガクと震えだした。

「ただいま。あなたの服、洗って乾かしてきたよ」

女がビニルの袋を抱えて帰ってきた。俺はただテレビの画面を見入って震えていた。どうにも止まらない。ルミ子が死んだんだ。誰かが殺した。女が無言でベッドに入ってきた。俺の横に座り、身体を摺り寄せてきたかと思うと俺を抱き締めた。女の身体が温かい。俺の震えはそれでも止まらないので、女の身体も一緒に小刻みに動く。俺は目を瞑り、上を向いた。ルミ子が死んだ。誰が殺した？ 俺か？ 女は無言で俺を抱き締めたままだ。俺たちはテレビの画面を眺めたまま、ずうっと、ただぼうっと眺め続けた。

彩子さんと俺

どのくらい経ったのだろう。窓から淡い黄色のカーテンを通して西日が入ってきた。俺は目に涙を溜めながら眠ってしまったらしい。女が白いスーツに身を固めて、派手なネックレスをかけていた。

「起きたの？ まだ、寝ていてもいいよ。私はこれから出勤。一応、合鍵置いて行くから、出かけるのならば鍵をかけておいてね」

女の声は明るい。この女は俺をどうに思っているのだろう。こんなに無防備に俺を受け入れてくれるのか。

「夕ご飯に酢豚を作ったの。ご飯も炊いてあるから、おながが空いているようならば食べてね。じゃあね」

女は出て行った。俺は再びルミ子のことを考えた。

「ルミ子を殺した人間は誰なんだ」

俺は自分を奮い立たせるように声を出した。立ち上がり、女が洗ってくれた服を着ると鍵を持った。酢豚を覗いたが二日酔いで食欲がなかった。俺は酢豚に手を合わせ、女に感謝した。ごめんよ、食べなくて。

部屋を出ると鍵をかけ、新聞受けから鍵を部屋に落としたりした。

「さよなら、親切さん」

アパートを出ると、どこに向かっているのもわからないままに走り出した。

俺は帰るんだ。俺の場所へ。彩子さんの所へ。そのまま、ルミ子の事も忘れてしまおう。ルミ子の記憶は充の記憶と共に俺の頭の奥へしまっておこう。

走っているうちに人通りが激しくなり、見たことのある風景が広がった。歌舞伎町だ。俺は走るのをやめ、速足で歩き始めた。駅へ駅へ。この混沌が今は嫌であった。とにかく、帰って眠りたかった。夕方の新宿駅東口は恐ろしい。何かのイベントでも始まるような人ごみだ。俺は何人にもぶつかりながら、駅に入った。人を避ける気

力が今の俺にはなかった。階段を降りて改札へ急ぐ。改札を通ると交番が目についた。警察官をまともに見るのが怖くて、思わず下を向いたまま、13番線プラットホームに急いだ。プラットホームにはいつものように、停車している満員電車を諦めて次の電車を待つ人々が列を作り始めていた。俺は無理やり電車に体を押し込んだ。発車の音楽が鳴ると共に、4〜5人が俺の入った入り口に押し寄せてきた。前に立った男のギトギトの整髪料が鼻をついた。電車のドアが無理やり閉まった。もう向きを変えることさえ許されないほど、人々の体が俺の体に押し寄せていた。そして右隣の学生らしい男のヘッドホンが耳に収まりきらない音を発していた。

俺は自宅のマンションの前で立ち止まった。俺の大学進学と共に彩子さんの本社勤務が決まり引越してきたばかりのマンションだ。12階建ての3階にある俺の部屋を見上げると、明かりが見えた。彩子さんが帰ってきている！俺の心は弾んだ。部屋の前で深呼吸を一度して玄関を開けた。廊下の奥のリビングから声がした。

「拓也、お帰り」

「ああ、彩子さん、帰っていたんだ」

俺はゆっくりと廊下を歩いてリビングに入ると、仕事机に書類や図面を広げている彩子さんに声をかけた。彩子さんが頭を上げて俺を見た。

「現場での打ち合わせがすぐに終わったのよ。明日は朝一で本社で会議があるから、これをまとめないとな」

彩子さんは建築士で今は地方の温泉地の開発を手がけていた。3日間、出張で留守だった。

「夕飯は駅弁買ってきたからね。そこに置いてあるでしょう」

食卓の上に釜飯が1つ置かれていた。

「彩子さんの分は？」

「食べちゃったわよ。おなかいっぱい」

彩子さんは、もう俺に視線を向ける気がないらしい。図面に夢中

だ。俺は彼女の仕事の邪魔にならないように静かに釜飯を食べ、俺の部屋に入り、ベッドに横になった。そして、彩子さんが図面や書類を動かすカサカサと言う音を聞きながら、ルミ子の事を思い出していた。ルミ子は天国で充に会えただろうか。会えてもわからないのかな？ いや、親子なら会ったことがなくてもわかるだろう。絶対。

「親子ならか」

俺はそう言っただけ息をついた。

充、充、充。

俺の唯一の友人。小学5年生のままの少年。彼はずっと11歳のままだ。

「……拓也、……拓也」

ああ、充。元気か？

「煙草吸おうぜ」

俺は吸わないよ。

「なんだよ。もう、いいかげん吸えよ。法律がお前が煙草を吸うのを許してしまうじゃないか。その前に吸ってしまいなよ」

……充、ルミ子に会ったか？

「なんだよ。ルミ子さんは、きつと拓也お前にしか興味はないよ。ルミ子さんにとって俺なんてどうでもいいのさ」

お前が捜し出せよ。きつとそっちに行っているはずだから。

「……捜して、捜して、どうしろって言うんだよ。母親なんていらねえ」

ははっ、抱きしめてもらえよ。ルミ子の胸の谷間に顔を埋めろよ。いい気分だぜ。

「ふん、そう言うお前だって、お袋さんに抱きしめてもらったことなんかないだろ」

俺はいいんだよ。一緒に暮らしているしな。

「一緒に暮らしているだけだろ。それだけにどれだけの意味があるんだ。当たり障りのない会話をして、お前の本音を隠して、お前は

お袋さんが仕事をしているのを静かに見ているだけだ」

それで俺は十分さ。

「お前は、ずっとそうにやっつけていい息子を演じ続けるんだろっな」
俺はいい息子なのかな？ 彩子さんがそうに思っていてくれれば
それで俺はいいんだろっな。俺は演じているわけではない。演じて
いるわけではない……。

俺はルミ子を蹴った時の感覚を思い出した。

俺の本性？ あれが本性なのかもしれない。

俺はなんとも言えない嫌な気分になった。

早苗と俺 2

今夜も俺は新宿にやって来た。ルミ子のいない街に。あの日を思い出したかった。気を失ったルミ子を置いて逃げてしまった後の記憶を取り戻さなければならなかった。しかし、バーボンを飲んだことは覚えているが、どこの店で飲んだのかがわからなかった。そして、朝、目覚めたゴミの集積所さえ定かではなかった。あの時、そこまで気が動転していたことが悔やまれた。あの日、ルミ子が気を失ったことよりも、彩子さんにこの俺の行動が発覚してしまうことの方が恐ろしかったのだ。なんて男だろう。なんて情けないのだろう。

「ルミ子ごめんよ。情けない男でごめんよ」

俺は呟くと、涙が溢れてくるのを隠すために下を向いた。

「あら、この前の……」

不意に声をかけられて頭を上げると、あの朝に出会った女だった。俺は急いで涙を拭いた。

「この前はありがとございました」

「ううん、いいの。いなくなっちゃったから、ちよつと寂しかったわ。そうだ、今度お店に来てちょうだい」

女はピンク色の名刺を差し出した。俺はそれを無造作にポケットに入れた。涙を見られたのが恥ずかしかった。

「来る気なさそうね。まあ、いいけど」

「あつ、あの、この前、俺が寝ていた場所ってどこだか覚えていますか？」

俺が聞くと女は口に手を当てて笑い出した。

「覚えていないのも無理はないか。ここよ、ここ」

女は下を指した。俺はその指を追いかけるように下を向き、女の白く長い指を見た。きれいな指だ。そして、女の顔を見直した。目も鼻も口も小さくて整っていた。可愛い女だ。名刺をポケットから

出して見た。「早苗」と書いてあった。

「大丈夫？」

「あつ、はい」

「あなた、私の顔を今初めて見たって表情したわ。どうしたのよ。何か悩み事でもあるの？」

なぜか、女の声がルミ子の声に聞こえてきた。女の容姿も声もルミ子とは全く似ていないのにだ。

「顔色が悪いわよ」

女の声が俺を混乱させた。俺は頭を抱え座り込んだ。女の手が俺の前に差し出された。俺は女の手を握った。そして女の身体にすがつた。ルミ子、ルミ子。

「大丈夫？ また、うちに来て眠る？」

女の声はすでにルミ子の声には聞こえなかった。俺は我に返り、直立した。

「大丈夫です」

女は拍子抜けしたような表情になり、腕時計を見た。

「もう、行かなきゃあ。じゃあね」

俺は女に頭を下げた。

俺は女の後姿を見送りながら、自分の顔を軽く叩いた。しっかりとしろよ。充に笑われるぞ。そして、昨日俺が眠っていたここからルミ子の店までの行程をたどることにした。どこかあの夜の俺の記憶にあるものはないかを探しながら歩いたが、何も見つからないまま店の近くまで来た。店の前には警察官と杖をついた男がいた。

猿渡京一郎、ルミ子の愛人。そして充の父親。

俺は通行人と一緒に店の前を歩いた。その時、猿渡は警察官から視線をはずし、俺を睨んだ。俺は思わず視線を前に向け、気がつかれない程度に足を速めた。彼は俺を知らないはずだ。あの目は俺を見た。俺は動揺していた。振り返らずに歩き続けた。「ルミ子を殺したのはあの男だ」と言われて追ってくるのではないかという恐怖にかられた。俺はひたすら歩いた。結局、誰も追っては来なかった。

俺は一息つき、充に話しかけた。

充、お前の父親が俺を知っているかもしれない。俺がルミ子と付き合っているのを知っていたかもしれない。

「知られていてもかまわないだろう。ルミ子さんはもういない。取り合っ訳じゃないだろう」

もし、知っていたなら、猿渡は俺がルミ子を殺したと思うんじゃないか？

「違うんだろ？ なら別に心配することはないだろう？」

でも、容疑をかけられたら、彩子さんにも伝わるだろう？

「お前は優等生だもんな。彩子さんには知られたくないよな」

そうだ、だめだ。それはだめだ。

俺は知らぬ間に俺を包んでいる何かを取り外そうと身体中を引っ掻いていた。

「拓也。お前の周りには空気しかないよ。何を取り外そうとしている」

わからない。最近、俺を透明な膜が覆っていて、皮膚や口から空気を吸わせてくれない気がするんだ。なんだろう、とても薄い眼に見えない膜さ。

「お前、彩子さんにすべて本音をぶちまけてしまえ、そうすればいいんだよ」

なんだよ、それ。

「膜は彩子さんだよ。彩子さんがお前を優等生だと思っているという膜だよ。突き破らないとお前は窒息死する」

かまわない。それでも俺は彩子さんの優等生さ。

俺はふと行き交う人々が俺の様子を見ているのに気がつき、引っ掻くのをやめ、手をポケットに入れ歩き出した。そしてポケットの中の名刺に気がつき、取り出した。

「早苗か」

俺は早苗の指を思い出した。今日は誰かといないと全身を引っ掻き続けてしまうだろう。彩子さんはまた出張に出かけた。早苗のア

至極透明な膜

パートは覚えている。早苗はきつと何も聞かずに一緒にいてくれる
だろう。俺は早苗のアップパートへ向かった。

サヤと俺

俺は待ち続けた。早苗の名刺の店の前だ。アパートに向かったが、早苗が朝帰りでもしたら俺は待ちぼうけをってしまうと思いき直し店へ来た。

深夜。

「俺、何やっているんだろ」

俺は地面に座り込み、空を見上げた。

「何やっているんだろ」

空は曇っている。ネオンが雲に反射してなんだか夜明けにも思える。

「ありがとうございました」

早苗が出てきた。俺はぼんやりと早苗を見た。

「俺、何やっているんだろ」

俺はその虚ろな瞳のまま呟いた。早苗は客を見送る間は気がついていなかったが、店に入る前に俺に気がついてくれた。早苗がまっすぐにやって来た。フレアーのスカートから見える脛が綺麗だった。

「どうしたの」

「お願いがあるんだ。君の部屋で眠らせてほしい」

拓也は策略も飾り気も無い今の自分に驚きながら言った。

「さつきは断ったわ」

「さつきから5時間も経っているよ。1人が嫌なんだ」

「そうね、もうさつきではないわね。あと1時間待っていられるかしら」

「君と一緒に寝てくれると約束してくれるなら待つよ」

早苗は俺に手を差し出した。俺は素直にその手にすがった。早苗は俺を立たせると、駅に向かう道を指した。

「あの角に24時間営業のレストランがあるわ。そこでコーヒーでも飲んでいて」

俺はコクリと頷いた。早苗はふわりとスカートを回転させ店のドアを開けた。早苗は店に入る前に振り返った。

「ねえ、君なんて名前？」

「ミツル」

「じゃあ、ミツル、また後でね」

その夜、早苗と俺はベッドで眠った。早苗が俺の身体をずっと包んでくれていた。俺は2〜3時間熟睡をして目が覚めた。カーテンから朝日が漏れた。

「帰るね」

俺は小声で言い、帰り支度を始めた。

「よかった。ちゃんと帰る場所があるのね」

早苗は眠たそうにベッドの中で欠伸をしながら言った。

「これあげる」

俺が玄関のドアを開けようとする、早苗が何かを投げてきた。受け止めて見ると、鍵であった。

「いつでもおいで」

俺は無言で頷いた。

早苗のアパートから帰ると、シャワーを浴び、大学に行った。俺は工学部建築設計科の学生だった。建築設計の仕事に就けば彩子さんが喜んでくれるだろうと考えた結果、選んだ学部だ。俺は誰よりも優秀と言われる位置にいたかった。講義は誰よりも集中して受けるようにしていた。今日も、俺は前から1列目の席を陣取り、講義を聞いた。俺は誰よりも講義を理解し、優秀な人間でなければならなかった。……教授の言葉が耳に入るが脳の中核に届いてこなかった。

「何、俺、どうしたんだ」

まるで音の出ていないテレビのように映像だけが流れ、全く聞き取れない状態だった。

「……ルミ子の犯人、捜すって行ってなかったっけ？」

ミツル、今は講義中なんだよ。出てくるな。

「犯人捜せよ。犯人捜せよ」

講義が終わったなら、捜しに行くよ。

「早く、捜せよ。お前がやったことになっちゃうぞ」

……わかったよ。捜しに行くよ。今日は何も頭に入らないし、この講義が終わったら新宿に行こう。猿渡を調べてみるよ。

俺は新宿にやってきた。ルミ子の店の前。今日は扉が閉められ、警察はいないようだった。裏口に行ってみると女がゴミ袋を持ち出てきた。女は数度それを繰り返していた。この店で働いていたサヤだろう。俺は女が帰るのを待った。30分後、女は裏口の鍵を閉めて歩き始めた。後を追うと、すぐ近くのバーに入った。俺も後から入った。まだ、早い時間で、店内に客は少なかった。女はカウンタ―に座り、バーボンを飲んでいて。俺は女の椅子を1つ空けて隣に座った。俺もバーボンを頼んだ。女は俺に視線を向けたが、すぐに自分のグラスに視線を戻した。俺はバーボンをなめるように飲んだ。「情けない飲み方ね」

女が突然、話しかけてきた。女は怒っているような顔で俺を見ていた。

「この前、バーボンで記憶がなくなっただね」

「じゃあ飲まなきゃいいじゃない」

「いや、飲みたいんだ。ある人がバーボンが好きだったから」

「私のママもバーボンが好きだったわ。死んじゃったけど……」

「病気で？」

「ううん。殺されたのよ」

「誰に」

「多分、ママの恋人……」

俺は猿渡が疑われていると思った。ルミ子と俺の関係は誰も知らない。恋人と言えば猿渡だ。

「サヤちゃん、その辺りは喋っちゃだめって警察に言われているんだろ？」

バーテンが話しに加わってきた。やはりこの女はサヤだ。ルミ子が言っていた。サヤは気のいい子だけれどおしゃべりなのと。

「いいじゃない。ママはきつと幸せよ。恋人に殺されたのなら。あの日、ママ、あんなにうれしそうだったもの。オーナーに会う時は明らかに違う、女の顔をしていたもの」

猿渡ではない！ サヤは俺の存在を知っている？

「ママが殺された日に、ママはその恋人と会っていたのよ。絶対」
「なんだ、これは！ この女がそのことを警察に言っていたら俺は疑われる。」

「……それは、この前、ニュースで言っていたスナックのママが殺された事件のことなの？」

「そうよ。店はすぐそこ」

「あのスナックはママとオーナーの猿渡さんが恋人だって聞いた事あるけど……」

サヤは哀しみを秘めた笑顔を作った。

「表向きはね。ママは何か猿渡さんの弱みを握っていると聞いたことがあるわ」

「それは聞いたことがある。ルミ子さんが猿渡さんの弱みを握り、店を持たせたと」

バーテンが小声で言った。俺も聞いたことがあった。弱みが何かは知らないが。やはり、猿渡が怪しいんだ。でも、俺の存在もサヤには気づかれている。俺はバーボンのグラスを掲げた。

「知らない人だが、あなたのママに」

サヤもバーテンもバーボンのグラスを掲げ、そして飲み干した。

猿渡と俺

サヤはルミ子が殺された日、帰りがけにルミ子の携帯電話に掛かってきた相手の名前を見たと言う。「もう、すぐ来れるのね」ルミ子はそうに言っていたそうだ。

バーのドアが開いた。一同がドアの方を向くと、猿渡が立っていた。

「サヤちゃん、捜したよ」

猿渡は杖と足を交互に出しながら、俺たちに近づいてきた。サヤの隣にいる俺に視線を移すと一瞬、表情が曇った。しかし、すぐにサヤの方を向きなおし笑顔を作った。

「店をきれいに掃除してくれてありがとう」

「いいえ。あのままじゃ悲しくて……」

猿渡はカウンターではなくテーブル席に腰を掛け、俺に話しかけた。

「君はサヤの知り合いか？」

「オーナー、違いますよ。ここのお客様で私がママの話をしていたのよ」

「そうか失礼した」

猿渡は少し笑顔を見せ、バーテンに赤ワインをオーダーした。

猿渡京一郎。

今、俺は信じられない気持ちだった。この男、俺はずっと以前からミツルに聞いて知っていた。

ルミ子の父親と共に不動産業を営んでいた猿渡は、高校生のルミ子と付き合い充を身ごもった。ルミ子の父親は、ルミ子との関係を理由に猿渡から会社を奪おうとした。そんな中、ルミ子出産。

ルミ子の知らない間に、充は高杉家にあずけられた。その直後、ルミ子の両親は交通事故で死亡。ここまでが小学5年生の充が調べた

ことだった。その後の2人の動きは充には調べられなかった。

俺は充が死んだ後、2人を捜した。俺の親友が恋焦がれていた両親だ。猿渡京一郎と言う、不動産会社の社長がいるのを見つけ、身辺を探った。結果、ルミ子が見つかったのだ。ルミ子は猿渡を頼りにして生きてきた。「就職を機会に猿渡とは手を切ったの。でも結局、仕事をすぐにやめてしまつて猿渡を頼ったの」ルミ子は以前、そうに言っていた。俺にとっては、親友の父であり恋人の愛人だ。話せる位置に猿渡がいる。

「君はあの店には言ったことがあつたかね？」

猿渡の言葉に俺はルミ子と一緒に寝そべつたあの店の床が思い出された。

「いいえ、残念ですが入ったことはありません」

「あの店の床はこのワインのような深い赤色のカーペットが敷いてあるんだよ」

「オーナー、どうしたの急にカーペットの話をして？」

サヤは不思議そうに猿渡の回すワイングラスを眺めた。猿渡は赤ワインを口に含みゴクリと喉を鳴らした。そして、立ち上がった。「勘定してくれ！」

少し荒い口調で財布を出し会計をすると、ゆっくりと杖をついて出口へ向かった。サヤが先に立ちドアを開けた。

「ありがとう。君は良い娘だ」

猿渡はサヤに笑顔を向けた後、俺の方へ向き直った。

「店のカーペット。あそこでルミ子は恋人と抱き合っていたんだよ。警察でもはっきりとした証拠が取れている。そのまま死んだんだ。本望だろう」

それだけ言い残すと猿渡は出て行った。

「オーナーどうしたのかしら？ 少し変だったわ」

サヤは席に戻るとバーテンに話し掛けた。

「まあ、愛人だった女が恋人と会っていたと言うし、全裸で発見さ

れるしてシヨックなんだろう」

そんな2人の会話を聞きながら俺は、硬直していた。

あの鋭い眼、そしてあんなことを言うなんて！ 猿渡は俺が、ル
ミ子と付き合っていたことを知っているんだ！

彩子さんと俺2

俺は家に帰る道すがら、猿渡が言った言葉を思い出していた。

「あそこでルミ子は恋人と抱き合っていたんだよ」

充、俺、殺人者なんだろうか？

頭の中で充に問い続けるが、充からは何の返事も帰ってこない。充に見放されてしまったのかもしれない。充の母親を殺した俺を怨んでいるのかもしれない。俺はそんなことを考えながら、自宅のマンションにたどり着いた。

マンションを見上げる。俺の家には明かりが点いていた。彩子さんだ！俺は心が弾んだ。急いでエレベーターに乗り込み、エレベーターが開くと飛び降りた。一呼吸おいて玄関のドアを開けた。

「ただいま、彩子さん今日は早かったんだ」

「お帰り。今日は休みだったのよ！午前中で仕事を終わらせて帰って来たの」

「夕飯、食べた？」

「あつ、昼も食べるの忘れていたわ」

「やっぱりな。俺、チャーハン作るね」

彩子さんが俺の方を向いて笑顔になった。

「拓也、いつもありがとうね」

「なんだよ、急に」

俺は彩子さんの言葉に照れていた。俺はやっぱり彩子さんのいい息子で居続けたい。こんな俺がルミ子を殺すはずがないんだ。俺はそうに思いながら、チャーハンを作り始めた。俺は手早くサラダとスープまで作ると、彩子さんをダイニングに呼んだ。彩子さんは、頬張りながら笑顔になった。彩子さんは、最近はほとんど料理を作

らない。嫌いではないらしいが、惣菜を買ってきてしまった方がおいしいし楽だと言う。

「拓也、料理の腕上げたわね。最近、私が作るよりおいしい」

「やっぱり、惣菜を買ってくるより家で作った方がおいしいだろ？ 彩子さんが家にいる時ぐらいは俺作るよ。どうせ出張先では外食ばかりなんだろう？」

「そうね。外食しかないわね。でも、最近一緒に仕事をしている地元の人の奥さんに、たまにお呼ばれするのよ。おいしい手料理いただいているわ。でも、拓也の作ってくれるチャーハンの方がおいしいわね！ そうだ、そこのお子さんが今、高校2年生なのよ。奥さんに、私がこんなに家を空けている仕事をしているのに、拓也が良い大学に入ったのはどういう秘訣があるのかって聞かれたわ！」

「なんて答えたの？」

「うちの子は優秀だから！ なんて答えたかったけど謙遜して、たまたまですって答えておいたわ」

俺は一生、彩子さんの優秀な息子でいたかった。そして、彩子さんがやりたい仕事を集中してできることに何よりも喜びを感じていた。

「さてさて、仕事に戻りますか。明日は6時に出るわ」

「彩子さん」

「何？」

「身体に気をつけてよ」

「はい、気をつけます」

翌朝、俺はベッドの中で彩子さんが出かける音を聞いていた。それとともに、またあの言葉を思い出していた。

「あそこでルミ子は恋人と抱き合っていたんだよ」

俺は恐怖で震えた。猿渡は俺たちを知っている！ 俺は捕まるか

至極透明な膜

もしねない！ そうになってしまったら彩子ちゃんはどうするんだろう？

早苗と俺 3

俺は震えていた。

早苗のアパートの前だ。彩子さんが出かけた後、俺は猿渡の言葉を繰り返しながら震えていた。そして、無性に早苗に会いたくなつた。震えながら電車に乗り、早苗のアパートまでたどり着いた。昼、少し前だ。

早苗、俺はもうだめだ！ 早く開けてくれ！ 俺は祈りながら早苗がドアを開けるのを待った。早苗がバタバタと動いている様子がわかる。着替え途中と言っていた。彼女はなかなか開けてくれない。俺は自分自身を抱き抱えながら待っていた。

「ごめんね。どうしたの？」

早苗がドアを開けた。彼女の明るい顔を見た瞬間、俺は震えが止まった。

「なあ、食事にも行かないか？」

俺は彼女の顔にすっかり落ち着きを取り戻した。

「良いわよ。お腹空いてるし」

俺は彼女の手を握り、外に連れ出した。

早苗と俺は近くのファミリールレストランで食事をした。俺は彼女にくぐらさない世間話をしながら笑わせた。彼女はすべてを包み込むような笑顔を見せていた。食事の後、いぶん話し込み、ファミリールレストランを出たところには、すっかり暗くなっていた。バーに入り、2人で飲んだ。

「早苗といると落ち着くな。俺の母親みたいだ」

「あら、ミツルのお母さんに似てるの、私？」

「似ていないね。俺の母親は仕事人間なんだ。息子よりも仕事なんだよ。母親って言うのは俺を包んでくれるからさ。早苗といると、俺は本来の俺でいられる気がする」

「あら、良いこと言ってくれるのね。ありがとう」

早苗はそうに言くと、悲しそうな笑顔になった。それから少しの間、2人とも無言になった。俺はミツルと名乗っている時に、母親の話をするのは初めてだった。少し後悔していた。

「……私ね、母親に売られたの」

早苗がポツリと言った。俺が彼女の顔を覗き込むと、悲しい笑顔が続いていた。

「父は私が物心ついた時にはいなかった。でも、中学生の時に突然、警察から父が事故を起こしたと連絡が来たの。事故を起こして植物状態になってしまい、その上、借金を抱えていることがわかったの。父はすぐに亡くなって、残ったのが借金だった。母親は私と一緒に、水商売に入ったわ。それでも苦しくて、ある時、店のオーナーにお客さんと一緒にホテルへ行けと言われたわ。母は黙って私を見送った。その後、母親は私が稼げることに気がいたらしく、私を捨ててどこかに行ってしまったの。私、一人でその後の借金を完済したのよ」

「よく、がんばったな。辛かったらう？」

俺は早苗の頭を撫でた。早苗は俺にもたれ掛かった。

「初めて人に話したわ。でもね、私、辛いとは思ったことは無いわ。なんでだろう。あの時、そう初めて男に買われた時に私は辛いとか、不幸なんだとかそう言う事を考えるのをあきらめたの。そんなこと考えても何もならないと思ったから。だから、人に話すこともしたことないの。なんでだろう？ ミツルになんで話をしているんだろ。馬鹿みたい私」

早苗はもたれ掛かりながら、とても心地よさそうに目を瞑った。

俺は早苗に会いに来ようと思った理由がやっとわかった。俺も同じだ。俺もあきらめていた。早苗とは比べものにならない程度のものだが、家族をあきらめていた。彩子さんは俺の憧れであり、養ってくれるが、家族ではなかった。彩子さんに家族として接して欲しいと頼んだことはなかった。ただ、俺は愛想を振りまいていた。憧れ

の人に気に入られようとしていた。

「なぜ、あきらめちゃうんだ」

早苗がふと頭をあげた。

「俺たち、あきらめちゃだめなんだ。お前も辛いつて思わなきゃだめなんだ。もつとわがまま言わなきゃだめなんだよ」

早苗が不思議そうに俺を見た。そして、優しい笑顔を見せた。俺が何を言っても、すべてを受け入れようとしてくれる顔をしていた。俺たちはバーを出ると、早苗のアパートへ帰った。そして、俺たちは初めて抱き合った。今まで何度も俺は早苗のベッドに横たわった。そして何度も早苗は俺の横に寄り添ってくれた。それなのに肉体を欲したのは初めてだった。俺たちはおそらく、今までの人生で初めて他人を心まで受け入れた。彼女が泣いた。今までの過去の辛さを全部吐き出して泣いた。そして、幸せそうに笑った。

朝日が黄色いカーテンから差し込んできた。

「俺、大学に行かなきゃあ」

「ミツルは大学生なの？」

「そうだよ、俺は大学生さ」

「知らなかったわ」

「だっってお互い何も話さないで来たもん……。早苗、今は時間がないけど、今夜また来る。そして俺の話を聞いてくれるかな？」

「そうね。大学から帰ってきたら、また話をしましょう。待っているわ」

俺は今夜、早苗にミツルのこと、ルミ子さんのことを話そうと決心した。

警察と俺

大学の講義に久しぶりに集中することができた。俺は大学生で建築を学ぶ身だ。何かあるうと、学び続けなければいけない。時々、早苗の顔が脳裏に浮かび、その度に安堵感が湧いてきた。

講義が終わると、俺は早苗のアパートに向かった。新宿駅を出てルミ子さんの店の前を通る。通り過ぎたところで目立たないように手を合わせた。ルミ子さん、きつと充と仲良くやっているよね。だって会いたかつたんだもん。充が死んでいることも知らずにいたから悲しんでいるかもしれないな。

「君、ミツルだね」

不意に背後から男の声がした。俺は振り返らなかつた。怖くて振り返られなかつた。ミツルと言う呼び名は限られた人しか使わない。「ミツルだね」

再び、声が聞こえ肩に手が掛けられた。目の前にも、厳つい男が現れた。

「警察の者だが、君に聞きたいことがあるんだ」

俺は臆病だ。逃げようと服従しようともせず、そこに立ち尽くすことしかできなかつた。

やはり、俺がルミ子さんを殺したのか？

そのまま俺は警察に連れて行かれ、無機質な1室に入れられた。学生証を持っていたため、俺の本名は明かされてしまった。彩子さんにもすぐに連絡が行くだろう。俺は夢の中にいるような感覚だった。目の前に移る映像にもやががかかっていた。男たちに質問されるが、頭に入っていない。俺は初め、ただ1つのことしか考えられなかつた。

彩子さんに、どう言い訳をしよう。

俺は警察と一言も会話をしなかった。

その日の取調べは終わり、俺は留置場に入れられた。1人になり少し落ち着いてきた。なぜ、俺の事がミツルだとわかったのだろう。ミツルと言う名はルミ子さんの携帯電話の履歴からわかったのだろう。しかし、店の前を通った俺がミツルであるとなぜわかるのだろう？ サヤがルミ子に会いに来たのを見ていたのだろうか？

しかし、この前のサヤの様子ではそんな事はないように思える。俺が聞かれているのは、ルミ子に会っていたと言うことの確認であった。ルミ子と会っていたと言って、その先はルミ子さんと抱き合っていたかと言うことになるだろう。そして、その先はルミ子さんを殺したかと言う問いになるのだろう。俺がそれは聞きたい。殺害のなんの手がかりもない状態で会っていたことを認めれば、俺は容疑者になってしまう。ただ、会っていたことを認めなくても、ルミ子さんの身体にはルミ子さんと俺が抱き合った痕跡が残っていないはずがない。

俺は容疑者になる！

恐怖が全身に震えを起こした。息がうまくできない。俺は何かに覆われてるようだ。このまま、窒息してしまいそうだ。

ルミ子さん、一体、誰に殺されたんだ？

俺はもがいた。息をしなければならぬ。落ちつかなければと深く息を吐いた。吐いたことにより肺が酸素を欲し、勢いよく空気が気管を流れた。肺を思い切り膨らませた後、ゆっくりと息を吐く。俺はそのまま深呼吸を続けてなんとか落ち着きを取り戻した。そして、この場をどう逃れるかを考え続けたが、答えが見つからなかった。どちらにしろ、彩子さんは息子が警察にいたことを知らされた

だろう。彩子さんはショックだろう。優秀な俺が警察にいらんだ！
そうだ、もうすでに良い子の俺は取り繕うことはできない。ならば、全部話してしまってもいいのかもしれない。もう、優秀な良い子の拓也は存在しないんだ。そうに思いつつ、躊躇していた。今まで拓也とミツルと言う人間を、俺は分けてきた。早苗に2つの俺のことを話そうと思っていた矢先だ。2つの俺のことを警察で理解してくれはしないだろう。このまま黙り続けよう。ああそうだ、早苗は俺が行かなくてがっかりしているだろう。寂しがっているだろうな。

「あつ、早苗か！」

俺は不意に声をあげた。早苗は俺をミツルと思っている。

早苗が俺を……、いやっ、そんなことはないだろう。

彩子さんと対面

翌日、彩子さんと対面した。机を挟んで相對した彩子さんは、何も言わずに俺を見つめていた。彩子さんの目は赤く、瞼は腫れていた。寝ていないのだろう。俺はどうすればいいのか判断できていなかった。彩子さんも、何を言うべきかわからないのだろう。俺は、沈黙に耐えられず口を開いた。

「俺の、俺の父親はどんなやつだった？」

彩子さんは驚いたようだった。腫れた瞼を無理やり押し上げた後に瞼を閉じ、下を向いた。その後だ。信じられない事が起こった。彩子さんが椅子から転げ落ち、尻餅をついた。そして「オイオイ」と泣いたのだ。

俺は彩子さんが泣いたところを初めて目にした。俺は今まで父親について問うた事は無かった。彩子さんも父親について話したことは無かった。死んだわけでも離婚したわけでもない事は、なんとなく知っていた。彼女の主義の問題なのだ。結婚と言うより、彼女には父親と言うもの、家族と言う物の理念が存在しないのだ。俺は彼女の子供である。それ以外は何者でもない。家族ではないのだ。だから、俺は今まで問うた事がなかった。

「父親は、どんなやつだった？」

俺は意地悪であった。彩子さんの崩れた姿に被せるように、さらに問うた。彩子さんはひとしきり泣くと、俺をキツと睨みつけた。今まで見たことの無い彩子さんだ。

「拓也は意地悪ね。本当に意地悪だわ」

俺は彩子さんの言葉に頷いた。彩子さんは立ち上がり、椅子に座った。

「本城拓巳さんよ。建築設計の仕事をしているわ。同僚だった。今は独立して事務所を開いているわ」

俺の瞳をまっすぐに見つめながら、彩子さんは答えた。そして、

俺の顔色を見て気がついたらしい。俺が求めている答えは、名前じゃないと。

「優しい人よ。私には優しすぎたわ」

彩子さんは今日始めて笑顔になった。

「わかった。ありがとう」

俺には十分な答えだ。それだけ聞ければもういい。父親がどこの誰かなんて言うのは、大した問題じゃない。どんな人だったかを聞ければ充分なのだ。そのまま、2人とも黙り込んだ。そして、面会の時間が終わった。別れ際、俺は彩子さんに深々と頭を下げた。

「迷惑をかけてしまい、申し訳ございません」

彩子さんが無言で首を横に振った。俺はその姿に背を向け、面会の部屋を出た。

面会後の取調べで、俺はルミ子さんの恋人で、ルミ子さんが殺害された日に、彼女と抱き合っていた事、口論になり彼女を蹴った事、その後の記憶が全くない事を話した。警察は、アリバイの為にその日に飲んでいたバーを見つけると言ってくれた。バーを見つけ、そこで証言が取れば俺は殺人を犯していないと言うことになるそう
だ。

2日目の取調べが終わり、留置所に入れられた。

あの日のルミ子さんの顔が浮かんだ。白いふっくらとした顔。幸せそうに俺に抱かれていた。いつもはルミ子さんのマンションで会っていたのが、あの日は店で待ち合わせをした。猿渡が最近、ルミ子さんのマンションに突然、来ることがあるから、店の方が安全だと言ったことだった。店が閉まる時間には、猿渡は来ないからと言った理由だった。「猿渡はミツルの事、勘付いているかもしれないわ」ルミ子さんがそうに言っていた。それを聞いた時に、関係を解消するべきだったのかもしれない。

「元々、充の親捜しをしていただけなのに、何をやっているんだろ
うな」

俺は呟いて横になり、目を閉じた。彩子さんが見える。悲しい顔だ。その奥に充が見える。笑っている。

なんで笑っているんだよ。

俺は充に問うた。

「彩子さんに仕返しができたな」

充はニヤニヤしている。

仕返してなんだよ。

「お前はずっと恨んでいたんだ。愛情のない生活をさせられた仕返しだよ」

俺はそんなもの望んでないし、ましてや恨んだ事なんてない。

「嘘だね。俺の母親に代わりに愛情をもらっていた。それが証拠さ。それに普通は聞かずに、物心ついた時に『パパはどうしたの』って。

お前はそれをわざと聞かなかった。恨みを晴らす機会をうかがって、今日、一気に攻撃したんだ。良い子の拓也ちゃんが殺人容疑で捕まり、その時に父親がどんなやつかを聞く。彩子さんには地獄だぜ」

俺って、酷いな。

「でも、それがお前ら親子の不器用な生き方なんだよ。いいんじゃないか？ かつこよく生きなくてもさ」

いいのか？ 俺はお前の母親を殺しているかもしれない。

「馬鹿だな、お前。正体なくなるまで酔った人間が、人なんか殺せないよ」

そうかな？

「そうさ」

彩子さんと俺3

俺は、逮捕されて8日目に釈放された。容疑者が逮捕されたと言っただ。それ以外は何も聞かされること無く、俺は警察から彩子さんへ身柄を移された。彩子さんは俺たちのマンションに帰らなかった。都内のホテル、それも30階の部屋に泊まった。ルームサービスを頼み、夜景の見える窓際に食事が運ばれた。俺は彩子さんに話しかけられず、警察を出た時から数時間、2人は無言だった。食事をボソボソと食べ始めた時、初めて彩子さんが俺に話しかけた。「もう、マンションには戻らないわ。引っ越ししよう。大学もしばらく休学したらいいわ」

俺は今回のことが彩子さんにひどい影響を与えていることを悟った。

「どこに?」

「私が仕事をしていた温泉に行こうと思って」「仕事は?」

「いい機会だからやめたの」

「俺のせいだね……」

「違う、私のせい」

彩子さんは頬杖をついて、俺の顔を見ずに夜景を見ていた。

「私、あんたに申し訳ないと思っている」

彩子さんは俺を見ない。

「あなたを1人で生きさせていたのね。ずっと私たち一緒に暮らしていた。なのに私はあなたのことよく知らないのよ」

俺は頭の中でいろいろなことが駆け巡った。俺は彩子さんの事をよく知っている。彩子さんの字を書くときのくせも知っている。食べ物好き嫌いも知っている。眠ると必ずできる寝癖も知っている。仕事仲間とうまくいっていない時には、必ず肉を大食いすることも知っている。俺はずっと見てきていた。俺は彩子さんをずっと見て

きていた。

「家に帰ろう。せつかく本社で仕事するようになったばかりなのに、俺は無実だったと言うし、仕事に復帰できるんだろ？」

彩子さんは夜景から目をテーブルに向けた。

「マスコミが来ているの。あなたは未成年だから名前こそ報道されていないけれど、マンションの住人は気がついていないの。迷惑もかけられない。本当にいい機会だと思っているの。もう、朝早くから仕事に行つて、家に帰つてからも、仕事をし続ける生活からは離れようと思つたの。温泉の近くの建築設計事務所はどうかって話があるのよ。温泉地の方が設計コンセプトがいろいろあつて楽しそうだし……」

彩子さんは話し続けた。俺は、目を合わせてくれない彩子さんから目をそらし、夜景を眺めた。なんなんだろう？ こんな高級なホテルに泊まつて、そして明日には、見知らぬ土地に行く。俺は明日からでも大学に通つて、普通にすごしたい。俺、今まで充の親を捜す為に生きていたんだ。なんでだろ？ そうだこの人からは感じられない母親と言うものを捜していたんだ。でも、ルミ子さんと会つてからは、よくわからない生き方をしていた。それこそミツルと名を乗つてからの生き方が、悪かつたんだ。俺がミツルだと知つている人、早苗……元気かな？ 俺は一人で思いを巡らし、彩子さんは一人でしゃべつていた。彩子さん、一人で生きてきた俺に今更、彩子さんと一緒に生きようなんて無理だよ。そんなに一生懸命話さなくつていいよ。今夜、夜景のきれいなホテルで良かった。外を眺めていて飽きない。

「……愛人だつたみたいよ」

上の空だつた彩子さんの話がふと耳に残つた。

「何が？」

「桜ルミ子を殺害した人」

猿渡京一郎だつたんだ。

「行きつけクラブのホステスが通報したのですつて。その人、自分

で話したそうよ。その女性に感謝しなくてはね」

「そうだね。感謝しなくてはだね」

「警察では、その人の事、教えてくれなかったのだけれど、おそらく裁判で、あなたもその人も表現してもらおう事になると言っていたわ」

彩子さんは顔を少し伏せて、そうに言った。もう、事件に関わりたくないのだろう。裁判なんて先の話ですぐには終わらない。

「彩子さん……、ごめんなさい」

俺が言うと、彩子さんは俺を見た。そして、すぐに目線を外し首を横に振り、再び話し始めた。

「あなたは、来年、向こうの大学を受験しなさい」

「彩子さん、俺、まだ大学に籍があるのだから？ 退学届を出したわけではなんだろう？」

俺は大学に戻りたいがために強い口調で言った。今の大学は彩子さんを喜ばせるために厳選した。できれば退学をせずに通いたい。

「今は休学扱いよ。でも、大学側はあなたを受け入れる気はないわ。あなたは桜ルミ子さんに怪我を負わせたことには変わらないのよ。そここのところわかってるの？ あなたは人を傷つけたのよ」

俺は彩子さんの強い口調に驚いた。そして、ルミ子を蹴り上げたあの感触が甦った。俺は頭を抱えた。彩子さんが、俺に怒っている！ 俺に怒っている！ 俺は椅子から立ち上がり、部屋の中を歩き回った。そして、彩子さんを見た。彩子さんは悔しそうな顔をしながら俺を見ている。俺は彩子さんを睨み、彩子さんも睨み返した。俺はその彩子さんの目に脱力し座り込んだ。

彩子さんは怒っている。

彩子さんは座り込んだ俺を、抱きしめた。初めての体験だった。俺の母親が俺を抱きしめている。

「あなたは弱いわ。こんなに弱い。一人で生きさせてごめんなさい。私、知らなかったの。あなたがこんなに弱いとは知らなかったの」

俺は脱力した身体を抱かれながら、彩子さんの言葉を聞いていた。

彩子さんが俺に謝った。

この俺に。

一人で生きさせたと謝った。

その夜は彩子さんの隣で眠った。夜中に抜け出して早苗に会いに行きたかったが、彩子さんはその日、眠っていなかった。俺も一睡も出来なかった。そして、翌日、温泉地に向かった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0638b/>

至極透明な膜

2008年11月12日17時00分発行